

Bunkamura Gallery Selection 2025

Artist 河原 悠

私の制作している作品は、「もの派」の延長線上にある。「もの派」は、「もの」を主題として作品を制作・発表していた。「もの派」の中で、私はとくに榎倉康二の作品制作に感銘を受けている。「もの派」は、「もの」を主題として配置・制作を行ったことで、空間における物事の関係性や在り方について、新鮮な視座を獲得することができた。一方で、「もの」の提示の「しかた」を探究したことで、「もの」の素材それ自体を見せることができていないように思う。その点において、榎倉康二は「素材そのもの」を見せることに成功している。それは、榎倉が絵画というフォーマットを用いて、素材を「絵画として」制作したことに起因していると思う。

私は、彫刻というフォーマットの中で同様の試みを行おうとしている。しかし、「絵画」と「彫刻」は、メディウムとしての特性が大きく異なる。素材を主題とした彫刻作品を制作していると、とくに木材などは素材自体が刻一刻と変化するため、いつまでもその存在を捕まえられるように感じる。そこで、まずは素材を「完全に固定された状態」「完璧な状態」を仮に設定した上で、作品を完成まで導く。そうすることによって、素材の存在に触れ捕まえる事ができるのではないか。しかし、その完璧の状態は素材であるがゆえに刻々と変化し、その不完全性によってまた、存在がすり抜けていく。存在を知覚しようにも、私自身が不完全なことで、完全な存在を十分に感じることはできない。しかし、存在を捕まえるには、完全な変化しない状態に近づかなければ、それに気づくこともできない。私は存在を捕まえようとしている。

展示風景



スタッフ推薦コメント

見慣れたはずの視界に、思いがけない奥行きがひそみ、まるで何かがそこに息づいているかのよう。

河原悠の作品と向き合うと、私たちの〈見る〉という行為は心地よく裏切られます。

平面に彫刻の空間を閉じ込めた、だけでなく、凹と凸が反転する視覚のパラドックスは、作品の前に立った瞬間、鑑賞者の既成概念が揺さぶり、空間そのものを再定義してしまうほど、私たちの感覚を惑わせてくるようです。

木肌や繊維など自然素材のありのままの表情が透明な樹脂に封じ込められ、そこに内包された時間や記憶が、素材の質感と内なる生命力をより一層際立たせています。樹脂の鏡面は空間の光を柔らかく受け止め、朝夕の自然光や周囲の環境によって作品の表情は刻々と変化していきます。

平面と立体の二面性を持つ河原の平面彫刻は、洗練された奥行きをまといながら空間に寄り添い、観るものにささやかな気づきと対話をもたらすでしょう。

Bunkamura Gallery Selection 2025

Artist 北田 杏実花

私は磁器のパーツ（＝白い「骨」）と、布の編み地（＝赤い「肉」）を組み合わせ、
人造の肉体を作り上げようとしています。肉体とは魂の器、容れ物であり、魂と肉体が一体となることで
生命として動き出すとすれば、私が作ったこの肉体に魂が宿る瞬間は訪れるでしょうか。

今回の展示では、「人造の肉体」というテーマに至る前の「未知なる器」をテーマとした作品群も展示させていただきます。
異素材の複合について、また自分のこの手が何を生み出すのかという試行錯誤の過程をご覧くださいれば幸いです。

展示風景



スタッフ推薦コメント

そこに佇むのは、私たちが慣れ親しんできた〈うつわ〉ではない。

静と動、冷と温、硬と柔——異素材が絡み合い織り成す対比は、掴みどころのない自由なフォルムとなり、私たちの心もその舞へと誘われ、揺れうごめく。

北田杏実花のうつわは、アートオブジェのように逸脱した姿態を備えながらも、器としての自覚を失わずにいた。口と底が設えられ、何かを包み込もうと言わんばかりの柔らかな胴体が確かにそこにある。

この掴みどころのなさこそが器特有の受容性を際立たせ、無数の解釈を招き入れる余白を生む。観る者の想像や感情は制限なく作品に溶け込み、作品タイトルが示すように、見るたび、見る人ごとに、その人にとっての価値が生まれていく。

そうしたひらかれた自由さが、この作品の奥底で脈打つ魅力である。

Bunkamura Gallery Selection 2025

Artist 中屋敷 智生

わたしが目指す絵画とは、主客未分のまなざしを喚起するものです。

絵画を見るわたしたちは同時に絵画からも見られているのであり、両者は「見る／見られる」という立場を常に同時性のなかで交換し続けています。見るものと見られるもの（主体と客体）の境界がこうして溶け合った先には、それらが未分化されたものとしての「永遠のまなざし」が立ち上がるに違いありません。

そのようなまなざしを呼び起こす絵画を、わたしは描いていきたいと考えています。

展示風景



スタッフ推薦コメント

以前に中屋敷さんが作品のことを

「固定されない絵。この絵の中でずっと旅をしたり会話をしたり。次また見た瞬間に絵が動いて違うような。絵の中に入ってグルグル回って楽しんでほしい」

と話されていたことが心に残っています。

作品を前にすると聞こえてくるリズムや動き、軽やかさや温度、やわらかさなどの質感。そして想像するイメージや爽快感などの自分の気持ち。

中屋敷さんの描く色・形そのものや、マスキングテープの形や凸凹感、その裏に隠れた見えない色も感じることで、そこに湧きおこるたくさんのイメージや言葉・リズムはまさに旅や会話のように、見るごとに違う変化をもたらしてくれます。

目で見るだけじゃない。

情報やイメージを五感で味わうような、そんな瞑想のような作品なのです。

私は作品タイトルも好きです。とても詩的だと感じますし、作品のイメージを軽々とクリアに導いてくれます。だからこそ、まずはタイトルを見ずに自分の五感で絵と向き合うことをお勧めします。タイトルは作品の見え方を変えるかもしれませんが。言葉と絵が合わさることで絵の世界が爆発的な広がりを持ったり重層的になったりします。そんな変化を楽しむのも私が中屋敷さんの作品を味わう一つの方法です。

Bunkamura Gallery Selection 2025

Artist 原 裕菜

昨年春の個展用に、一瞬の時間の流れを2コマで表現したシリーズを制作しましたが、今回はそのシリーズに新たに描き加えたものと、自分の作品の特徴の一つでもある「黒」を多く使った作品を追加しました。

この「黒」を重視した描き方は、マリオ・ジャコメッリやジョセフ・クーデルカなどの白黒写真のシンプルな画面構成に影響を受けたことから始まり、コントラストの強い色彩とシンプルな構図を模索し始め、「BUTTER」や「セヘルが見なかった夜明け」など装画の仕事でも多くの方に認知していただけるようになった自分の表現方法のひとつだと思います。画面の中の何気ない一場面が、シャッターを切った後の残像のように脳裏に残るような絵が描きたいと思っています。

展示風景



スタッフ推薦コメント

黒と黄色を基調とした質朴な色彩、一捻り加えられたモチーフや構図。繊細に描かれた表情は、一見シンプルでありながら、出会った者を惹きつける奥ゆかしさを宿しています。

数々の小説や雑誌の挿画をはじめ、幅広く活躍する原裕菜さん。私が初めて原さんの作品に出会ったのも、とある小説の表紙でした。お名前を知り、SNSを検索し、気づいたときには、私は原さんの作品の虜になっていました。

とてもお洒落で、かわいくて、優しくて…
時には、クスッと笑みがこぼれてしまうような、ちょっとシュールな作品も。

張り詰めた緊張の糸をほぐし、穏やかな気持ちに向かわせてくれる原さんの作品たち。きっと皆さまの暮らしと心にも、そっと優しく寄り添ってくれるはずです。

Bunkamura Gallery Selection 2025

Artist 二見 勘太

昨年、熱海の旅館で半年ほど下働きをやった。

女中さんの補助が主な仕事であったが、お局 女中さんからお小言を頂戴する毎日であった。

小言を言われるのが仕事のような感じであった。気にしてしまう方なのでスルースキルの高い人に憧れた。

女中さんのありがたい小言を「馬の耳に念仏」よろしく聞き流す少々滑稽な姿が浮かんできた。(念仏を聞き流す人)

シリアスの中のユーモアのようなものが好きなのかもしれない

展示風景



スタッフ推薦コメント

まさに「静かな奇妙」

決して華美ではなく無駄なものを削ぎ落とし、桐塑の質感そのものも味わい深い、そのシンプルな色姿形。

しかしそこに現れるは、目からのビーム！冷えピタ女！耳から念仏！

これは夢か幻想か。漂う昭和の場末感とアングラ感に私はどうしても惹かれてしまう…

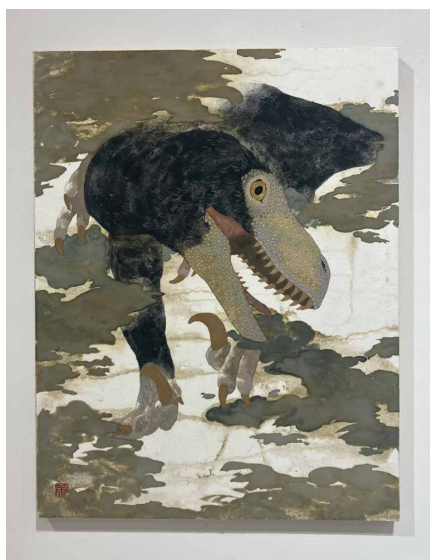
摩訶不思議 奇想天外 奇妙奇天烈

一度見たら離れられない、シュールで可笑しい二見ワールドにようこそ。

Bunkamura Gallery Selection 2025

Artist 水島 篤

展示風景



スタッフ推薦コメント

なぜ、これまで恐竜と日本画が出会わなかったのか――。

そう疑問が浮かぶほどに、水島篤の日本画は、恐竜の魅力を余すことなく引き出し、私たちの心を掴んで離さない。

対象を深く観察し写生することは、日本画における創作の根本とされるため、太古を生きた存在を生々しく描くのは一見不可能に思える。

しかし、水島の恐竜は、動き、表情、細かな肌理に至るまで、命が吹き込まれたかのような、圧倒的な存在感をまとい、画面から飛び出してくるように迫ってくる。

日本画では古くから時間と空間の象徴とされてきた雲は、かつて大地を闊歩した存在の気配に重みを与えながらも、その神秘性を引き立たせ、私たちを時空の旅へと誘う。

岩絵具ならではの粒子の質感や深みは、まるで化石そのものを思わせ、土の記憶を静かに呼び起こします。

その物質性もまた、私たち現代人が化石から想像する恐竜像に呼応し、より深くリアリティが宿されているのだ。

時空を超えた、遙かな太古のロマンが息づく世界。

ぜひ、その空気を身で感じてみてください。